

12/7(土) まいご! 倫理号です。相愛の雨です。忘年会のシーズンです。飲み過ぎに注意です。私は病気に慣れてその時の想いはよく分りませんが干支違いかも知れませんが今朝の事です
2018.12.7~12.13

850号
毎時頂の掃除... 私は... 掃除は... 鳥

先日、ある父子の挑戦を追ったテレビ番組が放送されました。パーキンソン病で闘病中の父親が、息子のAさんと、八十キロの道のりを自転車で踏破するというものでした。舞台は広島県尾道市と愛媛県今治市をつなぐ「しまなみ海道」。海峡を眼下に、アップダウンの激しい道を進むコースです。父親は、もともと趣味としてサイクリングをしていました。リハビリを続ける中で、しまなみ海道走破の夢が再燃。「同じ病の人たちにも元気を与えたい」という想いに、息子のAさんが応えたのです。

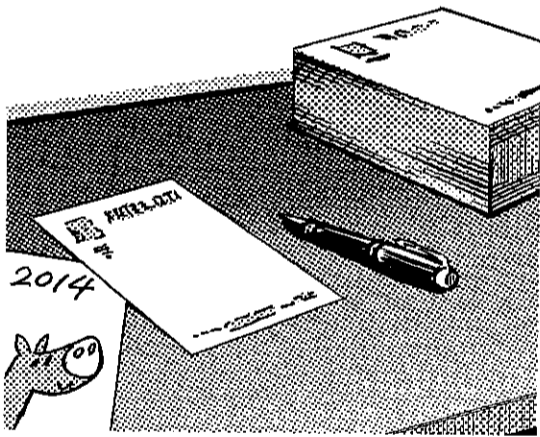
十年前にパーキンソン病を発症して以来、父親はほとんど自転車にまたがることはありませんでした。体は痩せ細っていましたが、二人三脚で日々のトレーニングを重ねて、いよいよ当日を迎えます。

出発から五時間が経過した頃、疲労により平衡感覚が麻痺して、手足が思うように動かなくなり、転倒を繰り返し、Aさんもこのままだと難しいと思ったそうです。しかし二日目、前日の遅れを取り戻そうとする父の必死な姿に、Aさんも坂道で背中を押しながら懸命にサポートを続けました。

三日目、家族や地元の人たちなど大勢の応援者が待つゴールに無事到着。みごとに夢を果たした父は「息子のお陰」と、何度も何度も口にするのでした。

今回の挑戦の背景には、父親の肉体的なハンデに加えて、親子関係の課題もありました。

病気が教えてくれた かけがえのない絆



絵・今谷 鉄柱

パーキンソン病を発症した当時、父親はAさんの介護を決して受けつけなかったそうです。息子の世話にはならないという父のプライドがあり、意見のぶつかり合いも度々ありました。そのため、Aさん自身、父をなかなか受け容れられませんでした。

しかし、トレーニング中のある日、父親の服の着替えを手伝いながら、表情の固かった父の目に、涙が浮かんでるのを見ました。その瞬間、改めて父親の心の奥にある深い想いにふれた気がして、へななとか夢を叶えてあげたいと思つたのです。

ゴール直後、Aさんは息を切らしながら、テレビのインタビューでこう語っていました。「病気は治る、治らないではなく、気持ち一つで素晴らしいことがある」。病気を乗り越えるというよりも、まさに、病気によって、親子の絆が強まったのでしよう。

倫理研究所の会長・丸山竹秋は、病について次のように述べています。

持病はないにこしたことはない。しかしどうしても治らないときは、その見方を変えることだ。つまり「自分のこの持病があるからこそ、かえって自分を守ってくれている」と、むしろ持病に感謝する。これは単に気持ちだけの問題ではない。事実がそうなのだ。持病は守り神なのだ。『つねに活路あり』丸山竹秋

病気は苦しいものですが、守ってくれる家族の存在を感じた時、病気の本当の意味が見い出せるのかもしれない。